

高槻キャンパスも

頑張っている

総合情報学部助教授 西本秀樹

理系と文系

総合情報学部は文理総合型の新しい形態のカリキュラムをもち、様々な能力・志向を持つ学生が集まっている。一般入試科目も英語・国語・数学のうち二科目を選択すればよい。学生たちは、入試の時、数学を選択したかどうかで自分は理系・文系と分類して不得意科目の言い訳にしているようであるが、実はそうではない。工学や理学を扱う分野でも哲学的な考え方や作文力は重要であるし、文学や社会科学では、数式モデルの扱いや統計分析は必須だからだ。

私は学部開設時から、うまくいけば従来の理工系研究室と文系研究室の両方の良いところを併せ持ったユニークな研究室が運用できるのではないかとねらっていた。旺盛な問題意識を持ちながら、人を納得させるための計量的分析法やプログラミング、プレゼンテーション法を学ばないで一生を過ごすことは、まったく残念なことだと思う。研究者だけでなく、あらゆる職業で自分の考えやモノの質を、いかに客観的に人に伝えるかは最も大事な仕事だからである。

システムづくりは必須

ゼミ生は興味によって、新型ソフトウェアを製作する応用開発系と基礎研究を志すデータベース系のいずれかに分かれ作業するが、必ずコンピュータを道具としたシステム作りやシミュレーション分析を課すことにしている。本年度の主なテーマを簡単に紹介する。応用系では、小説やエッセイから感情の流れを読み取る感性情報検索、インターネットを利用した経済学電子教科書、ディズニーランドを対象にした携帯移動案内、データベース系では柔軟サーバ構築、ディスク・アレイ効率測定、データ圧縮評価、暗号アルゴリズム、保全ログと広く出そろった。

結果につながる学習

ゼミ活動の番外編として、夏休みにはオープンゼミ形式で、通産省情報処理技術者試験の対策会を開催した。ゼミ内外から四十名の参加者が集まり、結果約50%の合格者を得た。さらに数名の者はデータベース検索技術者試験のような新しいスキルを試す資格試験にも挑戦し、合格を勝ち取っている。

春秋の硬式野球リーグ戦の関関戦には恒例行事として皆で応援に行く。声が枯れるまで声援し「関大生」を実感する一日だ。

本年度、学部としてはじめての卒業研究論文が提出された。その評価の一端として、組織系メディア系研究室有志による研究講評会や知識系八研究室の合同発表会が開催された。学部申し合わせではなく、一部の先生の働きかけから自然発生的に準備されたもので、小学会さながらのすばらしい内容であった。

高槻キャンパスの憂鬱

りっぱな大学院棟が完成し、贅沢だと思われるかも知れないが、あえて言おう。千里山では考えられないような通学の不便さや食堂の問題、居場所のない空間は、学部学生たちにとって最重要関心事であるのに、まったく改善される見込みがない。

学歌や逍遙歌を知らない関大生、我校の誇る総合図書館に一度も足を運んだことがない関大生の事を考えてほしい。

私の担当するもう一つのゼミ、2年次生の基礎演習で「身近な問題解決アプローチ」をあげたら、学生の提案するすべてのテーマがキャンパスライフに関するものだった。

スクールバス計画やファミリーレストラン、バーガースタンドの誘致、ロッカーや談話室の設置、自動販売機や公衆電話の増設まで出てきた。スクールバス計画は、市バス定期代一人年間約十万円、学生総計年間2億円を原資に大学でバス十数台を購入し、朝夕は近辺駅から高槻キャンパスまでの通学用にフル運転、昼間は千里山・天六循環とし、副次的に3つのキャンパスの相互利用を活性化しようとする大きな計画であった。

大学関係者、教育後援会、大学OBのすべての方々が高槻キャンパスに、より温かい視線と関心を向けて下さることを心から願いたい。

夕刻、自販機にもたれながら、スナック菓子を缶コーヒーで流し込む卒研生達を見ながら思う。